

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01328

研究課題名（和文）境界域に着目した古代西アジア帝国の支配形態と構造解明を目指す歴史考古学的研究

研究課題名（英文）Historical archaeology on the ruling form and internal structure of the ancient Near Eastern empires focusing on the frontier region

研究代表者

西山 伸一（NISHIYAMA, Shinichi）

中部大学・人間力創成教育院・教授

研究者番号：50392551

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,500,000円

研究成果の概要（和文）：西アジアの古代帝国における境界域に着目し、文献学・考古学・地理情報学・貨幣学の知見をあわせた総合的歴史考古学研究により、帝国の支配形態や構造を解明することを目的とした本研究は、新アッシリア帝国とサーサーン朝ペルシア帝国の境界域に相当するイラク・クルディスタン地域とイラン西部を対象に新たな「帝国像」を提示することを目指した。研究の結果、帝国の支配は、従来考えられてきた中央集権的なものではなく、各地がそれぞれの物質文化や支配構造をある程度維持しながら、帝国の中央部に政治的・文化的「忠誠」を誓うような形態であった可能性が指摘できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、古代帝国の研究に文献学、考古学、地理情報科学、貨幣学の多様な知見を合わせて総合的歴史考古学研究を展開した点に学術的意義があった。特に西アジアの歴史研究においては、専門的分化が著しく、多様な分野の知見を合わせた研究が少ない現象を憂い、可能な限り諸学問分野の観点から古代帝国を新たに見直す研究であった。その結果、古代帝国が従来よく主張されてきたような中央集権的なものではなく、特にその境界域においては、ローカルな物質文化や支配形態が維持されていた可能性が高いと考えられ、従来の古代帝国の支配構造を見直す研究成果を提示できたと考える。

研究成果の概要（英文）：This research project focused on the border area of the ancient Near Eastern empires and studied the theme from history, archaeology, geographic information science, and numismatics. Such multi-disciplinary project on ancient empires have not been conducted before in the Japanese academic society. We intended to present a new image of ancient empires which often thought to be constructed by a centralized socio-political system. The main focus was placed upon two ancient empires: Assyrian and Sasanian empires. The actual field work was concentrated in Iraqi Kurdistan. However, we also studied recent historical and archaeological data which presented in Western Iran. The research results show that the ancient empires were not entirely centralized states. In the border zone of empires, at least, the local societies maintained some sort of autonomy and independence in socio-cultural system.

研究分野：考古学、古代西アジア史

キーワード：アッシリア帝国 古代帝国 支配構造 歴史考古学 サーサーン朝 境界域

1. 研究開始当初の背景

帝国は、人間社会が生み出した最大級の国家組織であり、近年では考古学や歴史学の分野をはじめ、社会学や地理学などのさまざまな分野で議論が展開されている。しかし、古代帝国の支配形態や構造に関してはいまだ多くの課題が残されている。特に、古代帝国は、従来から主張されているような中央集権的な国家であったのかどうか、という点である。本研究では、帝国の特に境界域の支配構造に着目し、帝国の支配構造について新たな歴史像を示すことが主眼であった。

古代においては、現代に近い境界としての「国境」の概念はむしろ希薄であり、近年この境界域の研究が古代国家における支配構造の理解にとって極めて重要であることが指摘されている。この境界域の課題は、1980年代から考古学の分野で議論されてきた **boundary** 「境界」、または **frontier** 「前線」研究が再び注目を浴びるようになったことを示している。しかし、より具体的な境界域の研究、特に帝国という巨大な国家組織がその境界域をどのように管理・統治していたのか、あるいは境界域では物質文化はどのような様相を呈していたのかについては、まだ総合的な研究は存在しない。帝国の歴史的・考古学研究が進展する中で、古代帝国の研究から現代の国境に関する歴史研究にも新たな視点を提供できる研究であると考えられる。

本研究で対象とする古代帝国は、2つである。アッシリア帝国は、前10-7世紀に西アジアからエジプトまで版図をもった世界最古の帝国と考えられる。一方、サーサーン朝ペルシア帝国（後226-651年）は、版図はイラン高原からメソポタミア、シリア東部であったが、シルクロードを含む東西文化交流に大きな役割を果たした帝国である。この2つの帝国の境界域は、約300-400年間の治世で変化したものの、イラン高原とメソポタミア平原を分かちザグロス山脈はいつも重要な境界の役割を果たした。ザグロス山脈は、標高3000mをこえるいくつかの峰を持つ長さ1600kmの西アジアを代表する山脈である。現在でもトルコ、イラン、イラクの国境線を形成している。古来より、この山脈は自然の障害であるとともに、国家の境界域であった。アッシリア帝国やサーサーン朝ペルシア帝国がどのようにこの境界域を支配していたのか、あるいは本当に支配できていたのかを本研究では歴史考古学的手法を用いて検証する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、古代西アジアの巨大国家組織である帝国が、その境界域をどのようにコントロールしていたのか、またそこで展開される複雑な文化様相を明らかにすることにある。

これまで古代帝国については、その中心部にある王都が発掘され、神殿、宮殿などの公共建造物が明らかにされてきた。また王墓なども豪華な帝国文化を象徴するものとして研究・報告されてきた。しかし、境界域にはほとんど目が向けられなかった。帝国の境界域は、むしろ、「辺境」や「縁辺部」として研究対象にはなっていない。近年、ようやくアッシリア帝国についてはその属州や地方を対象にした考古学研究がでてきているが（例：J. MacGinnis, et al. (eds.) *The Provincial Archaeology of the Assyrian Empire*, Cambridge, 2016）、まだ境界域に着目した研究はみあたらない。

境界域は、1980~1990年代の Boundary や Frontier 研究により、中心部から離れた「遅れた」地域ではなく、むしろ「前線地」「フロンティア」として中心地からの影響が最も強くみられる地域であると考えられている。このことを帝国研究に当てはめると帝国の縁辺部には、帝国の支配戦略が最も鮮明に表れてくる可能性がある。この視点を実際にフィールドで検証するために、これまでの研究で開拓してきたザグロス山脈地域を調査対象とする。

調査対象地域は、これまで政治的理由によりフィールド調査が困難であった。しかし、近年の

治安の安定、政治スタンスの変化により、調査が可能となっている。日本調査団は、2014年よりイラク側のクルディスタン自治区で考古学調査を開始し、現在も調査を継続している。申請者は、アッシリア帝国の東部国境地帯に位置する大型拠点都市ヤシン・テペ遺跡のフィールド調査を2016年より指揮している。この調査により、アッシリア帝国のザグロス山系における境界域の物質文化と歴史景観が明らかになる予定である。この遺跡には、サーサーン朝ペルシア帝国時代の文化層もあることが確認できており、ペルシア帝国時代の様相もこの遺跡を通して明らかにすることができる。サーサーン朝は、イランで発生した帝国であるが、成立後まもなくメソポタミアに進出し、やがてメソポタミアを中心として発展する。ザグロス山脈は、サーサーン朝のメソポタミア侵攻の境界域にあたり、研究目的にそった成果が期待できる。

3. 研究の方法

本研究は、日本における文献学、貨幣学研究および現地でのフィールド調査を必要とする考古学、地理情報科学の2つのグループに分かれる。2020年度、および2021年度は世界をコロナ禍(COVID-19)が覆った年度でもあり、現地でのフィールド調査が困難となっていた。このため、考古学と地理情報科学の調査は、後半の2年間で実施せざるを得なかった。幸いにも現地の協力者や支援者の献身的な努力により、相当のデータを取得することができた。文献学的研究では、主にアッシリア帝国の王室文書や書簡、およびその他のアラム語資料などから対象とするザグロス山系の政治状況・歴史的背景について研究する方法をとった。また近年のサーサーン朝の研究に基づいた研究文献から、ザグロス山系の政治状況・歴史的背景についての情報を集成する方法をとった。またザグロス山系の東方に位置する遺跡についての情報を出版された文献を読み込んで集成を行う方法をとった。当初はイラン側での調査を望んでいたが、コロナ禍やそれに続く治安状況の変化もあり、特にフィールド調査に関連する研究は、イラク側に限定して行われた。貨幣学では、出版されているサーサーン朝コインのデータを収集し、それにくわえて未発表のデータを対象地域の発掘資料や博物館所蔵の資料から収集する方法をとった。

一方、考古学と地理情報科学の分野では、フィールド調査を基盤にすえた研究方法をとっている。まず考古学は、イラク・クルディスタン地域南部に位置するアッシリア帝国の拠点都市ヤシン・テペ遺跡の発掘調査を実施し、帝国の境界域に位置する都市がどのような物質文化を持っているか、帝国中央部からの影響はどのような点かがうかがえるのかを検証した。地理情報科学からは、衛星写真や標高データの分析からヤシン・テペ遺跡に位置する村落遺跡や水路、道路などの存在を推定し、それをフィールドで地表面をサーヴェイすることで確認する研究方法をとった。

4. 研究成果

文献学的研究からは、ザグロス山系が帝国の障壁というより、むしろ通過点や防御の拠点となったことが推測された。アッシリア帝国は、少なくとも東部境界域においては、拠点都市には帝国中央部からの直接支配をしいていたが、その他の都市や村落においてはアッシリアによる属州化以前の統治を維持した可能性が指摘できる。またサーサーン朝時代においては、イラク・クルディスタン地域南部のシャハリゾール平原は、テシフォン(クテシフォン遺跡)からシーズ(タフテ・スレイマーン遺跡)への交通路が走っており、ザグロス山系は、この場合、単なる通過点であったことがわかる。アッシリア時代に、シャハリゾール平原はザムア属州の中心地であり、平原の西部に位置するヤシン・テペ遺跡は、おそらくアッシリアの拠点都市であった可能性が高い。古代名は、まだ推定の段階であるが、アッシュルナツィルパル2世(r. 883-859 BCE)によって再建されたという都市 *Dūr-Aššur* の可能性も指摘できる。この都市は、これまで平原の南東部にあった *Bakr Awa* 遺跡が比定されてきたが、近年の日本調査団の発掘調査により、ヤシン・

テペの可能性が高まっているのである。本研究の調査においても「下の町」に広大なアッシリア時代の町が広がっていたことが確認できた。

貨幣学の研究からは、サーサーン朝時代において、この地域にもサーサーン朝のコインが広範囲に流通していたことが明らかになった。コインは、都市遺跡からでなく村落遺跡からも出土しており、またここ 10 年ほどで、サーサーン朝の村落遺跡の新たな発見がシャフリゾール平原のみだけでなく、スレイマニヤ県で相次いでいることが確認できた。このことから、ザグロス山系の西山麓においてもサーサーン朝の支配は境界域であったにもかかわらず在地社会に受け入れられており、今後の帝国の境界域を考える上での重要なデータを提供している。

考古学は、本研究において中心的かつ効果的な成果を上げた研究分野といえる。2020 年度はコロナ禍により現地でのフィールド調査は実施できなかったが、2021 年は、現地協力者の努力によりヤシン・テペ遺跡周囲（約 3 キロ四方）の踏査を実施することができた。なお、2020 年度は、日本において過去の調査データから人骨研究、衛星データを利用した都市景観研究、および採取した土壌分析研究の 3 点を実施した。2021 年度に再開したフィールド調査では、都市遺跡周辺に思ったより多くの村落遺跡が分布していることが明らかになった。

2022 年には、コロナ禍後初めてのフィールド調査を実施でき、ヤシン・テペ遺跡の南東部において「下の町」を発掘するとともに、日本調査団として初めてアクロポリスにステップトレンチを入れた。前者は、鉄器時代（アッシリア時代）の町の広がりを確認するためであり、後者は、鉄器時代を含むヤシン・テペの文化編年を明らかにするためである。2022 年の調査では、「下の町」で「子供の墓地」と「宗教的建造物群」を発見することができた。これらはまだ分析途中であるが、鉄器時代に「下の町」が広範囲に居住されていたことを示し、ヤシン・テペ遺跡がアッシリアの拠点都市であったことを明白に裏付けるデータである。アクロポリスの調査では、少なくとも前 6 千年紀後半（ハッスーナ期併行）から前期青銅器時代（前 3 千年紀）に相当する層位を検出した。

2023 年には、追加のフィールド調査として、「下の町」とアクロポリスの調査を継続した。その結果、「下の町」では子供と成人の墓地とともに、集落の縁辺部に位置する石敷き道路。水路や建造物を検出できた。またアクロポリスの調査では、中期青銅器時代に属すると思われる巨大な城壁を発見した。これによりアクロポリスの現在の規模は、青銅器時代に形成されたと推定できる。またその上には鉄器時代の文化層も確認できた。

地理情報科学においては、考古学分野と共同して、ヤシン・テペ遺跡周辺の都市景観の復元に成果を上げた。衛星データを用いた日本での解析をもとに、現地での踏査を経て、集落や水路の規模や時代を推定した。その結果、ヤシン・テペ周辺には、1 ha 規模の集落が多数存在し、鉄器時代の文化層を持つものは西方に集中する傾向があること、また集落間をつなぐ水路がわりと広範囲にわたって構築されていることが明らかになった。水路は、いつの時代のものかは今後の試掘調査が必要であることが確認できた。

このように古代帝国の支配形態について、文献学、地理情報科学、考古学、貨幣学からアプローチする手法は、新たなデータを取得することができ、帝国の境界域について新たな知見をもたらすことが証明された。つまり、帝国は、境界域において絶対的存在や、中央集権的な存在ではなく、拠点都市においては少なくとも政治的・文化的影響力を持っていたかもしれないが、その維持は、帝国支配以前からの統治体制がある程度維持されていた可能性を示している。つまり、帝国は少なくとも境界域においては、「面的（領域的）」な支配ではなく「点と線（拠点都市とそれをつなぐ交通路）」の支配であったことを示唆する。

古代帝国については、従来、文献学、考古学などがばらばらに研究してきたところに大きな課

題があった。本研究は、特に帝国の境界域に着目して古代帝国の支配がどのような実態であったのかを文献学、考古学、地理情報科学、貨幣学などの研究を総合して歴史考古学的研究を実施した。しかし、アッシリア帝国についてはある程度目的を達成できたが、サーサーン朝については資料の不足もありアッシリア帝国ほどの十分なフィールド調査を展開できなかった。またイラク側だけでなく、イラン側についても治安状況などにより十分なフィールド調査を実施できなかった点も計画通りにいかなかった点である。今後は、境界域で調査を継続できる意義を十分に生かしながら、古代帝国に関する研究をさらに発展させてゆく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Nishiyama Shin'ichi, Yamada Shigeo	4. 巻 113
2. 論文標題 Nabu at the Frontiers of the Assyrian Empire: An Inscribed Bronze Necklet from Yasin Tepe, Iraqi Kurdistan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Zeitschrift für Assyriologie und vorderasiatische Archäologie	6. 最初と最後の頁 250 ~ 265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/za-2023-0015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山伸一、山田重郎、沼本宏俊、S. J. Hama Rashid, N. N. Hama Hassan, H. H. Abdullah	4. 巻 31
2. 論文標題 アッシリア帝国東部辺境を掘る：イラク・クルディスタン、ヤシン・テベ考古学プロジェクト：第7次調査（2023年）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第31回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 128-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山伸一、J Abdul Massih	4. 巻 31
2. 論文標題 レヴァント回廊の歴史を探る：第9次（2023年）・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第31回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 134-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山伸一、山田重郎、沼本宏俊、S. Jamil, R. Karim, H. Hama Abdullah	4. 巻 30
2. 論文標題 アッシリア帝国東部辺境を掘る：イラク・クルディスタン、ヤシン・テベ考古学プロジェクト：第6次調査（2022年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第30回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 113-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山伸一、J. Abdul Massih	4. 巻 30
2. 論文標題 レヴァント回廊の歴史を掘る：第8次（2022年）・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第30回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 119-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山伸一	4. 巻 なし
2. 論文標題 ヤシン・テベ遺跡 新アッシリア帝国の辺境都市を発掘する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 清岡央（聞き手・編）『オリエント古代の探求』	6. 最初と最後の頁 111-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西山伸一・J. Abdul Massih	4. 巻 なし
2. 論文標題 レヴァント回廊の歴史を探る 第7次（2021年）・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第29回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西山伸一・H. Hama Abdullah・山田重郎・沼本宏俊	4. 巻 なし
2. 論文標題 アッシリア帝国東部辺境を掘る イラク・クルディスタン、ヤシン・テベ考古学プロジェクト・2021年度の成果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第29回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西山伸一	4. 巻 なし
2. 論文標題 アッシリアと水：都市、水、景観に関するヤシン・テベからの視点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山田重郎（編）『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 4 研究成果報告2021年度』（2018-2022年度 文部科学省科学研究費助成金 新学術領域研究（研究領域提案型））	6. 最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西山伸一・H. Hama Abdullah・山田重郎・沼本宏俊	4. 巻 なし
2. 論文標題 アッシリア帝国東部辺境を掘る イラク・クルディスタン、ヤシン・テベ考古学プロジェクト・2020年の進展	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第28回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 20 - 25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西山伸一・J. Abdul Massih	4. 巻 なし
2. 論文標題 レヴァント回廊の歴史を探る 第6次（2020年）・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第28回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 41 - 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shinichi Nishiyama	4. 巻 なし
2. 論文標題 Neo-Assyrian Provincial Control in the Eastern Imperial Reaches of the Assyrian Empire: A View from Yasin Tepe, Iraqi Kurdistan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 S. Hasegawa and K. Radner (eds.), The Reach of the Assyrian and Babylonian Empire. Case Studies in Eastern and Western Peripheries	6. 最初と最後の頁 45-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 西山伸一	4. 巻 なし
2. 論文標題 Palace Ware」とアッシリア帝国：その展開と利用のヴァリエーションに関する研考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本西アジア考古学会・第25回総会・大会要旨集	6. 最初と最後の頁 37 - 38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 西山伸一
2. 発表標題 イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ遺跡出土のアヒル型分銅：アッシリア帝国の度量衡制度の一考察
3. 学会等名 日本西アジア考古学会 第28回総会・大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西山伸一
2. 発表標題 アッシリア帝国の地方拠点都市におけるエリート層邸宅：イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ遺跡出土の事例を中心に
3. 学会等名 日本オリエント学会 第65回年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shinichi Nishiyama
2. 発表標題 The structure of the “lower town” in the Assyrian provincial cities: from the results of the Yasin Tepe Archaeological Project, Iraqi Kurdistan
3. 学会等名 13th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shinichi Nishiyama, J. Abdul Massih
2. 発表標題 Batroun (Lebanon) from the Iron Age to the Roman times: the evolution of the urban occupation
3. 学会等名 13th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西山伸一
2. 発表標題 鉄器時代北レヴァント内陸部と地中海文化のつながり：テル・マストゥーマ出土祭文土器の視点から
3. 学会等名 日本西アジア考古学会 第27回総会・大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西山伸一
2. 発表標題 クルディスタン地域にみる帝国境界域の支配構造：イラク・クルディスタン地域、ヤシン・テベ考古学プロジェクトからの考察
3. 学会等名 日本オリエント学会第64回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西山伸一
2. 発表標題 イラク・クルディスタンで新アッシリア帝国時代の拠点都市を掘る：ヤシン・テベ遺跡の最新成果から見る都市構造
3. 学会等名 新学術領域研究（研究領域提案型）都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 A02-計画研究 02 第22回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西山伸一
2. 発表標題 考古学と文化遺産保護の融合への挑戦：イラクとレバノンから
3. 学会等名 中部大学人間力創成教育院シンポジウム 第1回「中部大学のフィールド科学：愛知、中国、中央アジア、西アジア、アフリカ」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shinichi Nishiyama
2. 発表標題 An Assyria Border City in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: Yasin Tepe Archaeological Project, 2016-2019
3. 学会等名 12th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East (12 ICAANE), Bologna, April 6-9 2022 (オンライン開催) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西山伸一
2. 発表標題 バスタブ型棺とアッシリア：エリート層埋葬形態の地域差に関する考察
3. 学会等名 日本西アジア考古学会・第26回総会・大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西山伸一
2. 発表標題 アッシリア東部辺境のエリート層埋葬と中央部の関係：ヤシン・テペ考古学の事例を中心に
3. 学会等名 日本オリエント学会・第63回大会（大東文化大学：オンライン開催）企画セッション2：アッシリアにおける中心と周縁の関係性：楔形文字学、考古学、図像学から）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 J. Abdul Massih, Shinichi Nishiyama
2. 発表標題 New Discovery of Phoenician Batroun, northern Lebanon: Iron Age-Persian Period occupations
3. 学会等名 12th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East (12 ICAANE), Bologna, April 6-9 2022 (オンライン開催) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西山伸一
2. 発表標題 「Palace Ware」とアッシリア帝国：その展開と利用のヴァリエーションに関する研考察
3. 学会等名 日本西アジア考古学会・第25回総会・大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西山伸一・渡部展也
2. 発表標題 新アッシリア帝国の拠点都市の周辺景観：ヤシン・テベ考古学プロジェクトからの考察
3. 学会等名 日本オリエン学会・第62回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 H. Hama Abdullah, S. Nishiyama, and D. Mustafa Razawa (eds.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 文化庁・中部大学	5. 総ページ数 41
3. 書名 The Slemani Museum: Guidebook (Second Edition)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡部 展也 (WATANABE Nobuya) (10365497)	中部大学・人文学部・准教授 (33910)	
研究分担者	津村 眞輝子 (TSUMURA Makiko) (60238128)	(財)古代オリエント博物館・研究部・研究員 (72601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関